

日記その他にみる坪内逍遙の新舞踊劇運動の航跡

菊池 明

坪内逍遙の舞踊革新運動は明治37年11月、「新楽劇論」及び「新曲浦島」の発表によって開始された。それは満々たる湖の堰を一時に切って落としたような勢いと華やかさをもっていた。これにはよほどの蓄積がなければならぬが、これまで逍遙の心の中で、舞踊への関心、そして革新への思いはどういう風に育っていったのだろうか、またその後の心境はどう変化していったか、逍遙自身の書き残した日記回顧録からたどってみた。

そこでまず資料となるべきものを記しておく。

逍遙が残した自己に関する記録には、『少年時に観た歌舞伎の追憶』『柿の蒂』等の自伝的、また回顧的著作以外、次のようなものがある。

「日記」—この際その細目を挙げておく。「明治20・7・18～8・29」「明治21・7・12～11・7」「明治23・1・1～4・2,5・1～5・9」「明治32・8・1～8・12」「明治33・3・11,9・3～9・9」「明治34・4・3～6・?」「明治36・1・1～8・10,12・24～31」「明治37・1・2～9・28」「明治38・1・11～1・16」「明治40・10・24～11・1」「明治42・5・14～12・30」「明治43・1・2～1・4,2・29,7・23～8・4」「明治44・6・26～7・8,10・5～10・10,10・22～23,12・19～12・26」。以下は明治45年から昭和10年2月まで継続する。うち日数の少ない部分は多く関西東北等の旅行記である。そのほか逍遙自らが大正中期に作成したと思われる『幾むかし』と称する日記抄（明治5年から22年まで）と、昭和8年頃作成した『逍遙年譜』がある。

ざっとこのような状態だが、逍遙自身も「私の旧日記はそのどれもが甚だ零碎な、粗末なものだが、とりわけ明治23年から32・3年頃までののは、或ひは全く欠けていたり、紛失していたり、或ひは甚だしく不備であったり」と言っているように、逍遙の前半生、学生時代、小説戯曲その他文学活動、教育活動などの部分が大きく欠如していて、いかにも残念である。しかし逍遙在世時このほかに、まったく日記が存在しなかったかということ、それは一がいには言い切れない。事実『幾むかし』は日記からの抄録であり、「逍遙年譜」も当時の日記の断片を貼り付けた箇所があるからである。ある時期逍遙自身の手で整理廃棄が行われたかとも想像される。それは兎も角として、このよ

うに資料が乏しいことをまず明らかにしておきたい。

逍遙の観劇歴は明治2年、11歳のとき、母に連れられて名古屋の大曾根の芝居を見たことにはじまる。父の其樂には観劇の趣味はなかったが、母ミチは非常な芝居好き、お蔭で逍遙は次々と歌舞伎を見ることが出来た。この記録は父の日記（「先考日記」）にもあるが、のち逍遙が大正9年に刊行した『少年時に観た歌舞伎の追憶』にくわしい。嵐璃寛・中村宗十郎・市川九蔵・実川延若・中村七賀助・助高屋高助など、その演目、芸風を目にうつるように詳細に描写しているが、舞踊についてはほとんど言及がない。むろんこの書には振付兼舞踊師西川鯉三郎についての章はあるが、それは後の研究で幼時の回顧ではない。

逍遙が上京して、九世市川團十郎に心を動かしたのは明治11年6月、新富座の開場の「松栄千代田神徳」の徳川家康役であったという。その追憶談に「鷹野帰りの家康、仲蔵の老農夫と松並木の応対は、哀れな処でも何でもないのだが、二人の態度といひ、口吻といひ、如何にも自然で真率で、ひしと心線に触れる所があったので覚えざるばると涙を落したことを憶ひ出す」とある。当時團十郎は活歴劇に入ろうとするところだったが、名古屋育ちの逍遙として、はじめて新しい物を観たと感じ、「明治末期の青年たちが初めてイブセンの翻訳物に接した時のそれに類する感じがしたのであろう」と書いている。以来逍遙は団十郎の讚美者になるのだが、その感動した演目に「地震加藤」「黄門記」「熊谷」などと数えたてるなかで、舞踊の演目については挙がっていない。この頃の逍遙の眼は団十郎の活歴劇へ向いており、そして遠く新史劇創造をのぞんでいたと思われる。

明治18年6月、逍遙は「当世書生氣質」、ついで「小説神髓」を発表して一躍文壇の寵児となった。同時に東京専門学校（現慶応義塾大学）の教員となり、翌19年には結婚し、よそ眼には順風満帆の姿とも見えたが、自身はそれとは裏腹に文学上の悩みに襲われ、かつ健康を害していた。『幾むかし』の20年頃に、「五月末方脳具合あしく意気沮喪す 之と同時に我筆の陋劣を憤り恥づる心甚し 果は悉く管城子と縁を断ちてぶらぶら遊びて日を送る 読売の論説も絵入朝野も已に一ヶ月余筆をとらず」とある。

この20年7月12日逍遙は関西へ旅立った。これは朝日新聞からの招待もあったが、気分転換、療

養が目的で、夫人の熱心な勧めによったものであった。その旅行は約40日間、京都から奈良、神戸、有馬を経て大阪、名古屋に至るというものだったが、そのときの日記はじつにくわしい。一種の取材メモで将来これをもとに小説か紀行文を書く計画でもあったらしく、その土地の風景や風俗、習慣、出会った人の印象などその描写は微に入り細にわたる。だが不思議なことに観劇の記事は全くない。

ちょうどその時大阪の中座では「当世書生気質」が劇化されて上演していたが、それについての記事すらもない。あるいは見なかったかもしれない。また名古屋へ帰ってしばらく滞在していても、一度も劇場へ足を運んだ様子はない。少年時代あれほど血を湧かした芝居熱はどこへ行ったのかと思うようである。

その逍遙は翌明治21年に至って大きな転換期を迎える。11月3日「此夜二葉亭来るを幸、感ずる所あり、断然文壇を退かんと決心す」（『幾むかし』）となり、さらに「能ふくんば演劇刷新の為に新作を提供せんとす」（『自筆年譜』）となってゆく。

このように舞踊には全く関心がなかったかとも思われる逍遙の日記で、やや注目していい記事がある。それは『逍遙年譜』の明治27年3月の項で、日記の一部を貼り付けた部分である。

「三月二十六日午後竹柴保治、其老妻西川仲治を招き、水口、金田を招き例の劇の演習を庭内で行ふ」
「四月十三日此日午前西川仲治来り学生連に振付をなす。十二時より東京専門へ出勤、其不在中稽古を四時まで続けしよし、奥、水口、金田は夜十二時まで居残る」

「四月十四日、運動会、午前七時過士行をみて向島に赴き、衆の来るを俟ちて隅田園に到る。野天劇大当り、夕刻本郷伊勢利にて食事をなし、大蔵士行をみて帰宅す」

この記事は向島の隅田園での東京専門学校の運動会で、その余興として学生劇を上演したときのものである。演目は「地震加藤」、学生全員による「かつぽれ」、それに坪内士行の剣舞があったという。この頃逍遙は演劇革新に邁進しているときで、前年史劇論「我が邦の史劇」を発表、さらに「桐一葉」の脱稿も近づいていた。また演劇研究の一手段としての明治23・24年頃からはじめられた朗読研究も着実に進展していた。

上演した「地震加藤」は九代目団十郎の当り芸で、逍遙の最も好んだ演目であり、せりふの指導は当然逍遙が当たったと思われるが、動きや形についてはその道のひとに依頼せざるを得なかったろう。

この西川仲治は西川流の女師匠で、もとお狂言師、のちには市川九女八のもとで女役者ともなっ

た経験もあり、また夫は竹柴保治という狂言作者だったから芝居道には明るかった。当時50歳を越えていたが、親切に学生の世話をやいてくれたらしい。当日逍遙は舞台監督兼道具方で、眼目の地震の場では、自ら戸板を叩きたたて効果をあげたというが、その成果は逍遙を満足させ「大当り」であった。

このほか『幾むかし』の5月頃に「仲治をして須磨浦の振付をさす」という記事がある。しかしこれは必ずしも舞踊を意味しないようだ。当時逍遙の門下で朗読に最も熱心だった奥泰資への逍遙の追憶談に、逍遙家の家庭劇で奥が「嫩軍記」の組打に団蔵ばりの熊谷になったり、士行の敦盛の馬の前脚になったりした」とあるから、おそらく歌舞伎の熊谷の組打をさすのであろう。ともあれ、仲治はその後逍遙家に入入りして家庭内での芝居のお師匠番をつとめていたらしい。『逍遙年譜』を見ると明治27年の頃に「この秋より舞踊の研究に志す」また翌28年の頃にも「士行・大造等に舞踊の稽古を始めしむ」とある。ここにはっきり逍遙の気持ちが舞踊に向かった様子が伺われる。

幼少時代歌舞伎に心酔した逍遙がまず文学の革新に邁進、一転して新史劇の創造、演劇革新となり、さらに舞踊劇運動へと発展してゆくなかで、この学生の野外劇そして西川仲治の存在は重視されてよいと思われる。

逍遙の研究はいつの場合でも実践的、徹底的で、理論と実際が平行して行われる。舞踊研究でも同様で、はじめは茶の間の隣りの六畳間を畳敷のまま稽古していたが、やがてここを板張りに改造して稽古場とした。

仲治は週二、三回は稽古に通ってくる。夫人もおさらいをさせる必要上、三味線の稽古をして地を弾いた。また女中や寄食者にも参加させるというまさに家族ぐるみの研究となっていった。

坪内士行は当時を回想して、「逍遙はほとんど毎晩われわれの踊りを復習させて見分するのである。自分自身は『春雨』一つ、『夕暮』の片端も知りもせず踊りもせぬくせに、『私は批評家としての目は、誰にも劣らぬという自信を持っている』と豪語する。その批評眼を唯一の武器として私共未熟者の復習を検閲するのであるから、たまったものではない。『まずい』『なっていない』『そんな足つきは駄目だ』と一々ダメが出る。『でもこう教わりました』『そんな筈はない、そんな足つきを教える筈がない。そこの処をもう少し外へ曲げて、爪先を内輪目に……いや、そうではない！』、ついに立ち上って来て、こっちの足をつかんでひねくり回す。危くころげかかる。『エエ、無器用な、よく見て教わらんからいかん』。いや散々である」と。

こうした逍遙の意欲にさらに拍車をかけたのは

明治32年6月名古屋の舞踊家西川嘉義の上京だった。その時の事情は『逍遙年譜』に赤インクで書いた紙片が貼付してある。

「織田幾の養女此月父光慶と共に出京、藤間勘右衛門の大温習を一覧し、兼ねて藤間流を学ばんとて也。其依嘱によりて妻幹旋し、浜町に藤間を訪うて承諾を得、九代目の春雨其他一二の振を移さしむ、此月3日の夜は嘉義来泊。西川石松と競争の始終を語る。時尚の推移に適應しかねて廃業せんと煩悶せし仔細を語るを聞きて一夜われまた安眠を得かねたり、翌朝懇ちに嘉義を慰諭し、奨勵す」とある。

当時西川嘉義は36歳、逍遙は41歳だったが、夜眠られなかったほどのショック、そしてこの記事をわざわざ自分の年譜に貼りこんだのは、自身の新舞踊運動に大きな意味をもったと考えたにちがいない。

この嘉義は逍遙の縁者であった。すなわち、逍遙の母方の祖母の妙里の弟、竹村小二郎（俳人鶴叟）の養子光慶の長女で、九歳のとき舞踊の師織田いくに見込まれてその養女になったひとだった。織田いくは藤間の流れをくんだ女流舞踊家で、西川鯉三郎が名古屋に移住するについてその門下となった。最初の名取りで、一門のなかでは門弟というより客分扱いの別格の地位を与えられていた。

嘉義も12歳で鯉三郎の門に入ったが、幾が見込んだだけあって、ぐんぐんその才能をあらわし、一門に重きをなした。しかし、明治32年2月、鯉三郎が77歳で没したあとの流儀内の内紛にまきこまれ、その苦悩のあまり一時は舞踊をやめたほどだった。嘉義が上京したのはその頃で、逍遙にその悩みを訴えたものと思われる。逍遙はこれに深く同情し、何とか助けてやりたいという気持ち、これも舞踊劇運動への力になったのでなからうか。

逍遙はのちこの嘉義を、明治41年5月、早稲田大学図書館寄贈慈善音楽会に出演させ、西川流の本流を伝えるものとして中央に紹介、また自作の舞踊劇「一休禅師」を初演させている。逍遙のこうした行為には身内意識が大きく働いていると思われる。逍遙が愛妻家であったことは有名だが、親類縁者にたいしても、思いやりがあり、援助を惜しまなかった。

明治26年養子となった士行は、次兄坪内義衛の次男で、6歳のときから逍遙家にあり、また大造は長兄信益の遺児で、明治20年に引き取られて逍遙家で養育されたひと。そのほか士行の兄鋭雄も逍遙が呼び寄せて早稲田を卒業しているし、姉の米の子、落合篤、徳平なども一時逍遙家にあっただけで、養女のはるは夫人の姪と関係にあった。また逍遙が晩年ポリドールでその朗読を吹き込んだのも、影絵映画『商人と猿の群れ』を製作したのも、遠縁にあたる杉本喜永の依頼だったからこそ実現

したものである。

逍遙の舞踊運動はもともと身内による研究活動である。その実験に参加するものは、士行、大造、くに（養女）、はる、といったひとびとであった。後年士行は当時を回想して、

「私が十八、九になった頃でもあらうか、忘れもしない木挽町のとある鰻屋へ二人きりで食事に入った時、つくづく私の努力を慰める言葉を尽した後、『今に舞踊界に大革命を起して、世界の芸術界を驚嘆させよう。名古屋には西川何某、九州には誰々、大阪には誰々、いづれも私の意を体して新運動に志しているから、お前が東京で中心になって一旗挙げれば相呼応して同じ旗の下に馳け参ずるのだ、しっかりやれよ』といわれて、武者振いを感じ吾れ生きて甲斐ありと思った」と書いている。

その士行は明治42年早稲田大学を卒業する。卒業論文は舞踊論であったがそれは、逍遙の理論（『新楽劇論』をさす）は全体的に演劇が中心で、むしろ振事論、所作事論と名付けるべきもの、純粹に舞踊の本質を論じたものでないという観点から書いたため、逍遙をいたく失望させた。同時に士行の身边に恋愛問題が起り急拠米国へ留学することになった。逍遙の心情は察するにあまりある。当時の日記に、

「九月三日洋行の件、此夜眠られず、十一時せき子（註、夫人）より士行の自白を聴く。去就を決す、徹宵」

「九月三日 午後士行に自由行動を許し、結婚に関して十分の自由を与ふ。十五年の苦心を弊履と抛つ」

とあり、また『自筆年譜』にも「向ふニケ年洋行の予定を聯か早めて十月二十七日に横浜より出帆せしむ。之と同時に士行を主に計画せし新舞台事業の宿志を放棄すべき決心す」とある。

当時芸協会は第二次に入り、逍遙はその会長として自邸内に演劇研究所が完成したところである。さあ、これから華やかに演劇運動を発足させようというその時期になお逍遙が抱いていた夢—士行を中心とする新事業とはなんであったらうか。「十五年苦心を、宿志を弊履と抛つ」といった激烈な表現をさせたその内容はどんなものだったか、今になっては知るよしもない。

付 記

この稿は平成元年5月、舞踊学会で行った講演の一部を整理、加筆したものである。

逍遙の舞踊劇運動は長い。以後随時その航跡の稿をついでゆきたく思っている。

*1989年度春季第27回舞踊学会『舞踊學』12-2号より転載